

サエボーグ

『House of L』

Saeborg

“House of L”

8.31 Sat – 9.8 Sun

愛知県芸術劇場 大リハーサル室

Large Rehearsal Room, Aichi Prefectural Art Theater



情の時代
あいち
トリエンナーレ
2019
AICHI TRIENNALE 2019:
Taming Y'Our Passion



Pigpen movie (2016)

Photo: Takeo Hibino

自らの皮膚の延長としてラテックス製のボディスーツを自作し、装着するパフォーマンスを展開するアーティスト、サエボーグ。性別などの固定化されたアイデンティティや、人間の身体そのものを超越したいという強い願望を原動力に、玩具のような雌豚や害虫の着ぐるみに身を包み、食物連鎖の最底辺で明るく生きる家畜たちの世界を作り出してきた。

今回、初の演劇的インスタレーションとして披露するのは、キモかわいい家畜キャラクターたちが楽しく暮らすリビングルームだ。まるでドールハウスのような無邪気な空間に招かれる私たち人間は、この奇妙な動物たちとどんな時間を過ごすのだろうか。

Saeborg creates latex body suits as extensions of her own skin, deploying them in performances. Motivated by her strong desire to transcend fixed identities (such as gender), and even the human body itself, she dons toy-like sow or insect bodysuits, creating worlds inhabited by livestock cheerfully living at the bottom of the food chain.

At Aichi Triennale 2019, Saeborg will create her first theatrical installation—a living room inhabited by creepy-cute livestock characters. What will it be like for us, humans invited into a space of dollhouse-like innocence, to spend time with these strange animals?

サエボーグ

1981年富山県生まれ

東京都拠点

自らの皮膚の延長としてラテックス製のボディスーツを自作し、装着するパフォーマンスを展開。性別などの固定化されたアイデンティティや、人間の身体そのものを超越したいという強い願望を原動力に、雌豚や害虫を玩具的にデフォルメしたボディスーツに身を包み、生態系の最底辺の生き物たちが織り成す遊戯的なディストピアを作り出す。そこでは、生殖や出産を管理され屠殺場に送られる家畜たちの世界が、無邪気な明るさゆえのアイロニーとして提示される。これまでの全作品は、東京のフェティッシュパーティー「Department-H」で初演された後、国内外の国際展や美術館で発表されている。



Photo: ZIGEN

Saeborg

Born 1981 in Toyama, Japan

Based in Tokyo, Japan

Saeborg creates latex body suits as extensions of her own skin, deploying them in performances. Motivated by her strong desire to transcend fixed identities (such as gender) and even the human body itself, she dons bodysuits that caricature sows or insects as toy-like figures, creating playful dystopias composed of the ecosystem's basest creatures. The lives of livestock—their procreative activity, the delivery of their offspring—are strictly managed, and then they're sent off to the slaughterhouse. In Saeborg's work, this world is portrayed with an innocent cheerfulness, resulting in a sense of irony. All of her pieces to present have been shown in international exhibitions and museums in both Japan and abroad, following premieres at the Tokyo fetish party Department-H.

主な公演・受賞歴

- 2019 Dark Mofu 2019、アヴァロンシアター、ホバート(オーストラリア)
- 2018 第6回アテネ・ビエンナーレ、アテネ(ギリシャ)
- 2018 TAG: Proposals on Queer Play and the Ways Forward、ペンシルヴァニア大学/ICA、フィラデルフィア(米国)
- 2016 六本木アートナイト2016、六本木ヒルズ A/D ギャラリー、東京
- 2014 「第17回岡本太郎現代芸術賞展」川崎市岡本太郎美術館、神奈川、岡本敏子賞受賞

Selected Works & Awards

- 2019 Dark Mofu 2019, Avalon Theatre, Hobart, Australia
- 2018 6th Athens Biennale, Athens, Greece
- 2018 TAG: Proposals on Queer Play and the Ways Forward, Institute of Contemporary Art, University of Pennsylvania, Philadelphia, USA
- 2016 Roppongi Art Night 2016, Roppongi Hills A/D Gallery, Tokyo, Japan
- 2014 The 17th Exhibition of the Taro Okamoto Award for Contemporary Art, Taro Okamoto Museum of Art, Kanagawa, Japan, Toshiko Okamoto Award

サエボーグ

情動資本主義モンスターと愛の戦士

聞き手: セバスチャン・ブロイ (ドラマトウルク)

「内臓」から「北斗神拳」で

——この間タスマニアのDark Mofoでパフォーマンスをした時に、今回の作品のためのリサーチもしてきたんですよね。何かヒントになるようなことがあったのか、その話をまずしていただけますか。

ポノロン・ワイルド・サンクチュアリー (ポノロン野生動物保護施設) に行っただけです。そこは普通の動物園ではなく、絶滅の危機にある動物や、病気や怪我をした動物をレスキューする施設です。タスマニアでは野生動物と車の衝突事故が多いこともあって、その施設にいる動物のほとんどはなんらか障害を持っている。で、その子たちに餌をあげたりすると、もうペロペロ舐めてもらえたりするんです。スタッフに愛されているからなのか、観光で来る人にも過剰なまでにサービスしてくれる。鳥たちにカメラを向けると、羽を見せてくれたり。中でもいちばん私が気になっちゃったのがタスマニアデビルのマリアって子。車に跳ねられて頭蓋骨自体がゆがんでいるし、脳に障害が残っているから、同じところをぐるぐる回ったり、明らかな異常行動を見せるんです。それは、衝撃的なビジュアルだった。マリアって名前もきっと「慈悲の心」をくすぐるためにつけられたんですよね。

——サエさんの主要なモチーフは動物的な身体です。海外からのオファーの中には、動物愛護を掲げる団体やアクティビストからのものもあるそうですが、サエさん自身はどうそれを受け止めていますか。

動物はかわいいし、大事だけど、たとえば食肉の問題といったことを考えてつくったことはなかったのが意外でした。でも海外に行くとき必ず「ビーガンですか」って言われたりするし、「ポークが好き」って言うと、ショックを受けるみたいです。私はただ、「人間」っていう自分の属性を超えるために、自分で自分の身体をつくりたかっただけなんですけどね。もともと、作品がどう読み取られるかということに関して「こうでなきゃ嫌だ」ということはないんです。でも、私自身は身体もセックスも人工的につくられたり管理されているものなんだと強調しているつもりでも、「これが大自然の息吹だ」みたいな逆の感想を言われたりすると「あれ」と思うことはあります。

——そういう誤解が出てくるのは、アート作品における批評性というものを、多くの人はまだ、表象主義のレベルで捉えているからじゃないかと思います。つまり、意味のレイヤーを経験と出来事のレイヤーから切り離して、膨張させて眺めている。でもサエさんの鑑賞者には、作品の意味構造がただ「社会問題」とリンクしてみえる表象主義のレベルを超えたところでこそ、さまざまな経験が待っているのではないのでしょうか。

よく聞く感想としては、たとえば「すぐくゴム臭い」って言われますね。それから「あんなに汗が出るんだね」とか。水たまりができてくるくらいだし、スーツの隙間から汗が飛んできますからね。それってやっぱり「身体」なんです。ラテックスは柔軟性もあって、デフォルメも可能で、質感が皮膚っぽくも見える。着ぐるみにすると内側がピタッとはりついて、さらに身体とのシンクロ率が高く

なるんですよね。さっきも言ったように、私は自分が決定した身体をつくりたいと思っている。

——現代美術では、テキストや音声、キャプションを使ってつくられた意味構造の中に、お客さんを埋め込むという「外から」のアプローチが多いでしょう。サエさんの表現は、そこを通さないうで、まず「内臓」のほうから力が広がってくる感じがします。だから、「北斗神拳」なんですよ(笑)。今回の創作過程で、これはひとつの合言葉になりました。サエさんの造形物には、単純な意味での可愛さだけではない、心に揺さぶりをかけるような魔術的な力があるんじゃないのかな。

そうですね。「どうして家畜をつくるの？」って、よく聞かれるんですけど、「弱いから」としか答えようがないんですよね。最弱のものをつくりたい。私は『ウルトラマン』が好きだけど、興味があるのは、ウルトラマンじゃなくて、殺されちゃう怪獣の方なんです。たとえばガバドンというキャラクターは、悪いことは何もしない。ただ、いびきがめっちゃめっちゃうるさいんです。だから退治しなきゃ、っていう話になるのですが……やっぱり退治以外の別の付き合い方を考えられないのかな。戦隊モノだと、みんなで力を合わせて一匹の怪獣をフルボッコにしたりするけど、それって、正義のヒーローとしてどうなんでしょう？と。怪獣は「異質なもの」であって、必ずしも悪いわけじゃない。それを排除しようとするのは、悲しいですよ。

——そういう独特なアングルから怪獣の存在をみているところに、サエボーグの作家性に関する大事なヒントがある気がします。単に社会の「よくない仕組み」を摘発して、そこに斬り込むようなアプローチとはいささか味が違うだろう。一般的な話として、アーティストには、批評家のことばを追いかけるような表現ではなく、批評家のできないことをやってほしいと思うんです。摘発できる「よくない仕組み」はいくらでもある。でも、誰が、それらの仕組み、その暗黙のルールを一時停止させ、圧倒的な他者性や想

像したこともない別の現実への壁を突破してくれるんだろう？ 造形するという行為の意味は、まず、そこにあるんじゃないかと思います。

そうですね。自由ってそういうことなんだと思います。一瞬だけでも、それが結晶化されているものが、私にとってのアートです。

——サエさんが題材にしている「家畜」についてももう少し話しましょう。この前、東京大学総合研究博物館の展示『家畜—愛で、育て、屠る—』を一緒に観に行きましたけど、何が印象に残りましたか。

家畜って、どうしても近代的な工業化の中で搾取されているというステレオタイプをまとっているんですけど、展示を監修した遠藤秀紀先生が世界中の牧場を旅した結果、たとえば品種改良された鶏がペットとして飼われていたり、「なんでこんな飼ってるの？」ってくらい役に立たないのもいて、家畜との付き合い方もさまざまだった、というのが面白かったですね。「どうして飼っているかわからない」っていうところは、大事なポイントだなと。遠藤先生によれば、家畜には食用と実験用、伴侶動物がいて、そこに共通するのは生殖の管理。それが家畜の定義なんだそうです。要するに食べることはばかり考えているわけでもないし、食用で屠殺するにしても、そこまでは丁寧に面倒を見て、生かし続けていたりもする。

——家畜を通して人間のあり方が展示されている。特に伴侶動物と人間については、お互いをつくり出すような関係があるんですね。さっきのポノロンの話もそうだけど、たとえば動物園の動物も、中身は動物でも、核家族のように檻の中で暮らして、人間の眼差しを受けて存在している。でも、サエさんのパフォーマンスの場合は、それが逆転して、人間の身体が奇妙な仮想現実には包摂されているような感じがします。これはなんだろう？ サエさんの家畜たちと遊ぶわれわれはいつか「どこ」にいるんだろう？

うーん。サエボーグランド？ やっぱこれも

現実と地続きの場所をつくっているとは思っています。そこで楽しくプレイしてもらえればいいし、自分で遊び方をつくってもらえればベストです。

ペット 伴侶動物から「ケア」を考える

—日本では、「女性作家」といったラベリングがされるのを、いつも不愉快に感じます。創作活動がそのようなヘテロ的な規範性を超えているにも拘らず、「男女」の単純な図式が、あらためて作品の鑑賞の仕方に刷り込まれてしまうからです。「フェミニズム作家」と言い換えても、その問題が解決した気分にはならないでしょう。サエボーグがやっていることをみると、それはむしろ、フェミニズムの意味を拡張しているものだと言えるのではないのでしょうか。

自分の自由な身体、生き方をつくるというのがもともとの目標で、そこに生も性も、不可避に入ってくる、全部セットだというふうに思っています。ダナ・ハラウェイの『サイボーグ・フェミニズム』を読んで、これは自分のやりたいことと結構つながってるなと思ったことがあります。サイボーグっていうと、完全な身体をイメージするけど、実はそうじゃなくて、完璧を目指して不完全なところを補おうとするばかりにいびつになってしまったものがサイボーグなんだと私は思っています。ダナ・ハラウェイは、その不完全さについて書いているんですよね。それともう一つ面白かったのは『サイボーグ・フェミニズム』も『伴侶種宣言』も、SFオタクにもキャッチーなタイトル、言葉づかいですよ。でも、それに惹かれて読んでみると、全然違うことが書いてある、という長い回り道をしていること。

—既成の社会的規範を温存させる意味のレイヤーを突破するために、彼女はそのような特殊な表現や造語で試行錯誤していると思います。その意味では、サエさんの創作とも通底するところがあるのかもしれないね。サエボーグの世界には、ヘテロ的規範性の奥底にある「自然／不自然」の二項対立を飛び越えた、どこまでも人工的で合成的なもの、科学技術社会の産物への愛

情を感じるところがある。自然では「ありえない」ものにこそ息を吹き込んで、それを外骨格のように身にまとって遊んでいるから「サエボーグ」なわけでしょう？

そもそも「自然」って、ないと思うんですよ。私は自分でつくらないと自分の身体とのつながりを感じられないというのもあって、全部が人工物になっているのはある意味ただ、そのプロセスの結果なんです。

—サエボーグのこれまでの作品では、とりわけ女性的にも見えるスーツと家畜のイメージとがリンクし、それに対する暴力や搾取とも思われるような行為が繰り返されます。しかし暴力や搾取というのは、それだと気づかれない、むしろ自然状態だと勘違いされることに特徴のひとつがあると思います。今回のパフォーマンスで、サエさんが可視化しようとしているのは、どんなことですか。これまでは農場が舞台だったけれど、今回はテーマが「家」になりますよね。

『House of L』っていうタイトルは『X-MEN』のキャラクターたちが住む「House of M」＝ミュタントの家からとりました。Lは、家畜＝livestockと生きる＝liveの「L」です。大きな家の中に、今回の主役とも言える、アグリーなペットがいるんです。ペットに興味を持ったきっかけは、うちの猫が病気になって介護が大変だからというのがありますし、それこそ『X-MEN』シリーズの『ローガン』で、ボケて、超能力をお漏らししちゃうプロフェッサーXの介護をしているウルヴァリンに同情したというのもあるし……でも、家族がいる人は誰も思い当たる問題ですよ。

—要するにケアの構造に関心を持ったということですね。そして、ペットには、ケアに関する政治性が内包されている。

そうです。「家」は、メンテナンスやケアの場で、そこでされていることって、まさに感情労働なんですよ。ペットは伴侶動物ですから、人間にとってのサービス業のような役割を担っている。

—ハラウェイも『伴侶種宣言』の中で、ペットが人間に対して「無条件の愛」を示すというファンタジーを投射されることがあると述べている。その願望に応えられないと、飼い主に捨てられてしまうという危険性が、ペットの命に関わる問題だと。

だから、かわいいかどうかをめぐる競争になってしまうんですよ。それで、今度の作品で、私は可愛くない、アグリーな子も入れようと思ったんです。

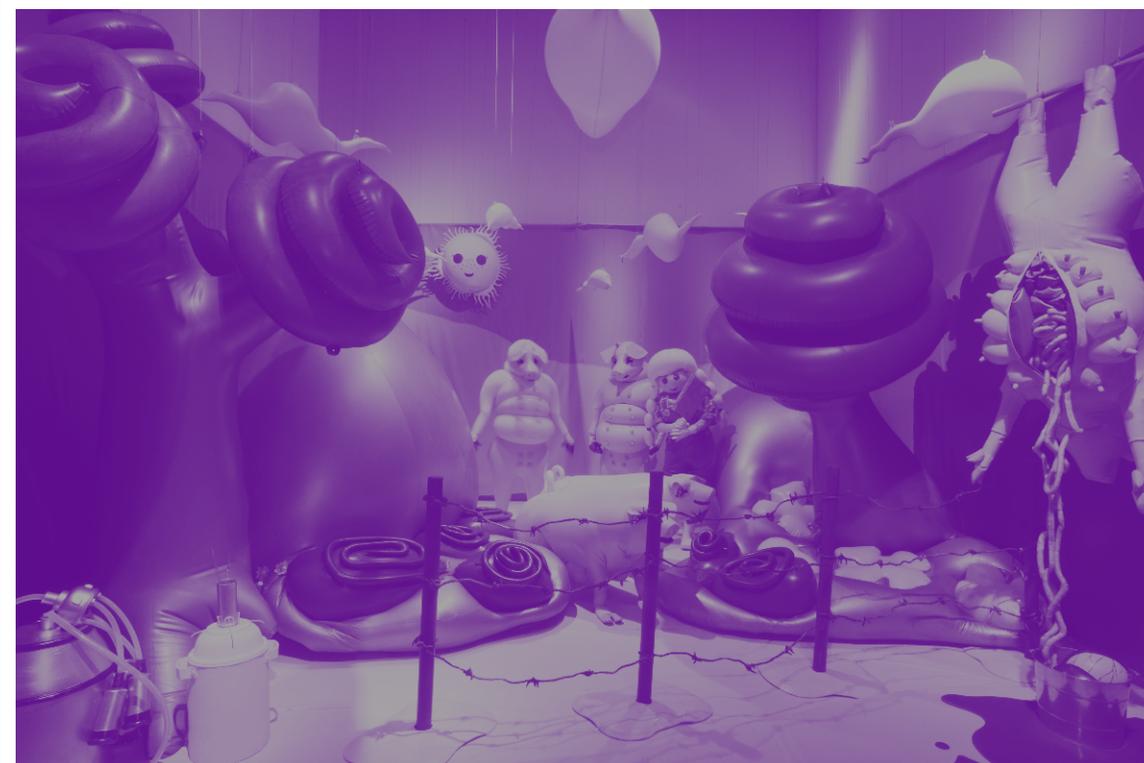
—私たちの生活にはマッピングされない不可視の構造がたくさんあります。ケアの構造はまさにそうです。今、資本主義の闘争領域はそういうものに及ぶかたちで拡張されつつあって、それらを愛や承認をめぐる競争原理の世界に「ミュレーション」させようとしている。情

動資本主義のモンスターあらわる……この新しい闘争の場では、単なる否定性や暴力はもう通用しないでしょう。SNS上では、まだまだ多くの人が空振りするけども、いまは、何か別の力が必要になるんじゃないか。サエボーグの家畜たちをみると、僕はそのうまく言葉にならない「力」が仄めかされているような気がしますね。

「家畜力」？（笑）

—うん（笑）。グロかわいくてデフォルメされたものにみえるけど、本当は不完全なものへの愛、ヘテロ的な規範性にも決して還元できないような愛の力で戦う戦士なんですよ。

ああ、いいですね。愛の戦士。ちょっとおこがましい気もしますけど。（笑）



Slaughterhouse-9 (2014)

Photo: Kyoichi Tsuzuki

Direction, Design: Saeborg
Dramaturg: Sebastian Breu

Latex Costume Performers:

Akari Ando, Yurie Ito, Miho Imai, Erika Iwasaki, Rie Usui, Yukiko Kusajima, Tomoka Sakakibara, Aoi Takayanagi, Cecilia, Tae Tsuyuki, Yurie Hashiba, Monica Maeda, Junko Yasuda, Tomomi Yamazaki, Tomomi Yuyama, Mikako Wada

Set Design Coordination: Takahiro Shibata
Set Design Co-operation: Gogh Imaizumi
Sound Effects Design: Fumio Yasue

Technical Manager: So Ozaki

Stage Manager: Takashi Kawachi

Stage Assistant: Natsuki Yamanaka

Production Co-operation: Junko Kumura, Mizue Fukutomi, Hikaru Miyagawa, TASKO inc. (Chika Kagaya, Yukari Yamazaki, Ami Takahashi, Takeo Kitazawa, Kana Fukuda, Ryo Inomata, Honoka Kira)

Support: TASKO inc.

Video Documentation: Daisuke Yamashiro
Photography: Masahiro Hasunuma

Curator: Chiaki Soma (Aichi Triennale 2019)
Production Manager: Sayuri Fujii (Aichi Triennale 2019)
Production Coordinator: Aya Comori (TASKO inc.)

Produced by Aichi Triennale 2019, Saeborg
Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co- Presented by Aichi Prefectural Art Theater

構成・デザイン: サエボーグ
ドラマトウルク: セバスチャン・ブロイ

着ぐるみパフォーマンス:

安藤茜里、伊藤友里恵、今井美帆、岩崎絵里加、臼井梨恵、草島侑子、榎原朋佳、高柳あおい、ちえちりあ、露木妙、葉柴優理恵、前田もにか、安田順子、山崎友美、湯山友美、和田美夏子

美術協力: 柴田隆弘
美術デザイン協力: ゴッホ今泉
音効製作: 安江史男

技術監督: 尾崎聡

舞台監督: 河内崇

演出部: 山中奈津紀

製作協力: 久村順子、福富瑞恵、宮川ひかる、TASKO inc. (加賀谷静、山崎裕可里、高橋亜実、北澤岳雄、福田朱菜、猪又亮、吉良穂乃香)

協力: TASKO inc.

記録映像: 山城大督

記録写真: 蓮沼昌宏

キュレーター: 相馬千秋 (あいちトリエンナーレ2019)
制作統括: 藤井さゆり (あいちトリエンナーレ2019)
制作: 小森あや (TASKO inc.)

製作 あいちトリエンナーレ2019、サエボーグ
主催 あいちトリエンナーレ実行委員会
共催 愛知県芸術劇場

「あいちトリエンナーレ2019」パフォーマンス AICHI TRIENNALE 2019 / Performing Arts

キュレーター Curator

相馬千秋 SOMA Chiaki

アシスタントキュレーター Assistant Curator

藤井さゆり FUJII Sayuri

コーディネーター Coordinator

清水翼、村松里実 SHIMIZU Tsubasa, MURAMATSU Satomi

テクニカル・ディレクター Technical Director

尾崎聡 OZAKI So

票券 Ticket Administration

山崎佳奈子 YAMASAKI Kanako

翻訳 Translation

Art Translators Collective

(相模展子、ベン・ケーガン、リアン・キャンライト)

Art Translators Collective

(AISO Nobuko, Ben CAGAN, Lillian CANRIGHT)

編集・執筆 Editor/Writer

鈴木理映子 SUZUKI Rieko

編集: 鈴木理映子

デザイン: コバヤシタケシ (SURFACE)

印刷・製本: 藤原印刷

あいちトリエンナーレ2019 情の時代 2019年8月1日 [木] - 10月14日 [月・祝]

主な会場: 愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、名古屋市内のまちなか (四間道・円頓寺)
豊田市 (豊田市美術館及び豊田市駅周辺)

芸術監督: 津田大介 (ジャーナリスト/メディア・アクティビスト)

主催: あいちトリエンナーレ実行委員会

助成: 損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)

公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド

一般財団法人地域創造

AICHI TRIENNALE 2019: Taming Y/Our Passion

August 1 (Thursday) to October 14 (Monday, public holiday), 2019

Main Venues: Aichi Arts Center, Nagoya City Art Museum, Nagoya City (Shikemichi and Endoji)
Toyota City (Toyota Municipal Museum of Art and venues in the vicinity of Toyotashi station)

Artistic Director: TSUDA Daisuke (Journalist / Media Activist)

Organizer: Aichi Triennale Organizing Committee

Supported by Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc. [SOMPO ART FUND]

(Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture), Association for Corporate Support of the

Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture, Japan

Foundation for Regional Art-Activities

